福音合同セミナー（1）（御殿場ＹＭＣＡ東山荘）

新しく生まれる
――福音を真に生きる――

２０２４年5月25日
弘野慶次郎

福音を真に生きる　新しく創造された者　『無者キリスト』の「十字架と無私」　幸いなるかな、
霊の貧しき者　人は新たに生まれなければ　和解

２０２４年合同セミナーの主旨：「福音を真に生きる」

２０２４年5月25日　弘野慶次郎

「新緑の美しい季節となりました。主イエスの平安のうちにお過ごしのことかと思います。今回も皆様とともに尊い主イエスを讃美したいと願っています。

テーマは「福音を真に生きる」としました。そもそも「福音」は自分にとってどういうものなのか。その福音のとんでもない有難さを再確認したいと思うのです。福音を生きることは難しいことではありません。幼な児が入っていける、これほど単純な易しい道はありません。生きて働きかけ給うイエスの愛（助け主・命の御霊）をただ頂くだけ。自分では何一つ出来ない赤ん坊が加護のもとに生きている、そんな世界です。幼な児のような誰もが入れるのでなければ福音（真理）とはいえません。彼らが生きる歓びを喜々として全身で現わしているような、ごく自然なあり方です。あの天真爛漫さに周りの大人もつい嬉しくなります。まさに光の子たち。どんな人にも幼な児のような光の子へと生まれ変わって欲しい！　生活のなか全存在で福音を生きて欲しい！　そのご本願が十字架の死に極まって、御子イエスは復活なさったのです！

福音を生きるとは、命輝く歓び、平安、力、自由、大希望の事態です。それを身近な方々にも分かち合えたらと思っています。すべてが恵、恵がα（アルファ）にしてω（オメガ）。讃美！

感謝！」

＊

●福音を真に生きる

今回のセミナーの主題は「福音を真に生きる」というテーマで取り上げたいと思います。私が書いたセミナーの主旨の文章の中に、

「どんな人にも幼な児のような光の子へと生まれ変わって欲しい」

とあります。生まれ変わって欲しいのが神さまの願いなんです。それがニコデモの対話にちゃんと書いてある。ヨハネ伝3章の3節に、

「[3]**イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。**

この「はっきり言っておく」というのは、

「あなた方は絶対にこれを知っておいてほしい」

という願いが、このキリストの言葉の中に入っている。他の訳では「真実に」とかいろいろありますけれども、

「これだけは覚えておけよ」

という意味です。

人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

「新たに生まれなければ」という。そうしたら、ニコデモは平凡な人で、僕らと一緒ですよ、

「新しく生まれる」

とはどういうことか、全然さっぱり分からなかった。我々も分からない。聖書に「新しく生まれる」とキリストの言葉で書いてあるのは、ここだけなんです。よくこれを残しておいてくれたなと思う。

「新しく生まれる」というのは――肉体的に初めに生まれるというのは誰でも分かっています――「新しく生まれ変わる」というようなことは仏教の方でも言わない。死んだら極楽に行くということぐらいしか言いません。この世で僕らが生きている間に「新しく生まれ変わる」ということは、このイエスの言葉としてしか残っていないのではないかと思う。「新しく生まれる」というのはとんでもないことです。ニコデモには全然理解できなかった。我々もほとんど理解できない。けれども、「はっきり言っておく」と書いてます。

「お前はこれだけは覚えておけよ、新しく生まれ変わらなかったら、絶対に神の国なんかとても見ることができない」

と。そのあとの5節にも、

「[5]**イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。**」」

新しく生まれなければ、絶対に入ることができない。これは物凄く重要なことで、この重要なことをあまり言わない。聞いたことがない。

「上から生まれなければ」

“unless a person is born from avove”

という、これは受け身です。自分で生まれ変わるのではない。神さまに生まれ変わらせてもらう、新しく生みおとしてもらうという意味で、どこまでも受け身なんです。神さまによってもう一度新しく生まれ変わらせて頂かないと、神の国には入ることは絶対にできない。見ることさえできない。この重要性はすごいんです。

単に我々が同じような人間的な次元で生きていたら、いつまでたっても神の国を見ることもできないし、入ることもできない。神の国に入るということは、新しく生まれなければならないということがここではっきり言われている。これは物凄く重要なことなんです。英語では、

“he cannot enter the kingdom of God.”

と書いてある。神の国には――“cannot”です――絶対に入ることはできない。見ることもできない、ということをここで言っておられる。こういうことはニコデモも分からないし、我々も普通の生活をしていたら、絶対に分からない。そのことをはっきりとパウロも言っている。ガラテヤ書6章14節、

「14**しかし、このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この十字架によって、世はわたしに対し、わたしは世に対してはりつけにされているのです。**

もう死んでしまったんですよという。この当時は「割礼」が問題であったから、「割礼は問題でない」と書いてある。

15**割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。**」

「新しく創造される」ということが「生まれ変わる」ことです。このパウロはちゃんと聖霊体験をしているから、生まれ変わった体験がある。今までのものと全く違った世界に入れられたパウロの真実の告白です。「本当にそのとおりですよ」ということを言っている。

ガラテヤ書というのは、ローマ書の前に著したといわれているから、割合と粗削りにはっきりと書いてくれている。ローマ書なんかは割合と整いすぎていて、やはり整いすぎているのはあまりよくない。ここは整っていない。ここではっきりと

「割礼の有無は問題ではなく」

という。当時は割礼が問題であった。今では割礼の問題なんかは言いません。けれども、人間の価値基準が一番問題になっている。割礼というのはその当時の習慣でしょ。それがなかったら本当に天国に入れないと、ユダヤ人はみんな思っていた。だから、「割礼の有無は問題ではなく」と書いてある。今ではそういう割礼の問題ではなくて、人間的な基準を問題にすることが多いんです、我々の日常生活では。だから、

「人間的な基準は問題ではなく」

と訳してもいいと思う。

「そうではなくて、大切なのは新しく創造されることです」

と。

「新しく創造されないと、神の国に入ることも、見ることもできない」

ということをパウロも言っている。これがニコデモとの会話の物凄く重要なところです。これがなかったら、「クリスチャン」といっても、これは全く人間の次元とは違う、全く違

った次元のことを言っている。この「新しく生まれ変わる」ということは、

「今までの人間的な常識的な次元からはるかに突き抜けている」

ということです。そういう

「突き抜けた次元の中に生まれ変わらなかったら、絶対に神の国に入ることはできないよ」

ということです。

●新しく創造された者

コリントの信徒への手紙二の5章にも同じようなことが書いてある。17節から、

「17**だから、キリストと結ばれる人は誰でも、新しく創造された者なのです。**「新しく創造された者」とは、新しく造られた者ですよということを言っている。

「キリストと結ばれてキリストに在る者は、キリストを生きる者は、新しく創造された者です」

と。

古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

もうこの時点でパウロは、

「古い旧約の時代は過ぎた」

ということをはっきりと宣言している。それが今の時代まで続いている。パウロの時代は創世記ですよ、キリスト教が生まれた創世記です。だから、割礼の問題とかいろいろ書いてある。

「もうすっかりと世の中は変ったんですよ、キリストが来られて」

という意味なんです。

「キリストと結ばれて、キリストと一緒に生きている者は、新しく創造された者です。古いものは世の中も全部過ぎ去ってしまった。新しいものが来たんですよ」

ということを言っている。

18**これらはすべて神から出ることであって、……」（コリント二5・17～18）**

と。決して自分から出ているものではありません。

「新創造がこの時代から始まった。一人一人が新しく生まれ変わらないとダメです」

ということをここで言っている。パウロがこういうことを言っているのは、パウロには体験がある。キリストはちゃんとニコデモとの対話ではっきりと言われた。

「新たに生まれなければ、産み落としてもらわなかったら、神の国を見ることはできない。入ることさえもできない」

ということを言っている。これはキリスト教会でもあまりそのことを強調して言わない。牧師さん自身が新しく生まれ変わっていないのかもしれませんし、そういうことがあると

思う。新しく生まれ変わってこそ、初めて『無者キリスト』の本も分かるようになる。聖書が分かるようになる。

僕が分かるようになったのは、見えてきたというか、自然に分かってきたというか、教えられていないのに聖書が読めるようになったということは、神さまによって新しく生まれ変わらせてもらったから。産み落とされたんですよ、僕は新しく。そうでなかったら、聖書なんか読めない。

僕はこんな所でしゃべるような人間ではない。嫌いなんですよ、しゃべるのが。けれども、しょうがないんですよ、ここでしゃべらないといけないのは、自分が新しい次元に入れられたものだから、やはりこれほど簡単で易しい道はないから、この道をなんとかして人に知ってもらいたいと思っている。

十字架がなかったら、生まれ変わることはできない。ところが、十字架というのは物凄い躓きなんですよ。

「知恵のある者、賢い者には隠して幼児（おさなご）にこの事態を表わしてくださいました」

というキリストの言葉があります。それは幼な児であれば、十字架は躓きではないんです。ところが、「己れが、己れが」と言って、自己を立てている人は全部、十字架に躓く。だから、ギリシア人も躓いたでしょ。多くの人がこの十字架に躓いている。それは賢（かしこ）すぎるんです、みんな。賢すぎるということで、

「幼な児のような者に表わしてくださいました」

というキリストの言葉があるように、

「それが御意にかなったことだった」

という。だから、僕はここで、

「幼な児のように生きてほしい」

ということを散々書くわけです。それがこのニコデモとの対話の一番の中心なんです。これはキリスト教会でもこれが中心です。「新しく生まれ変わる」ということが中心です。

「新しく生まれ変わらなかったら、人は神の国に入ることができないし、見ることもできない」

そういうことを言っている。

ここだけではないですよ。弟子たちがイエスに訊（き）くでしょ、

「天国で一番偉いのは誰か」

と。みんなこの地上の次元でものを考えているから、「誰が偉いか、誰が偉くないか」というのが問題なんです。ところがイエスは、

「そうじゃないよ、天国で一番偉いのは幼な児のような者ですよ。幼な児のようにならなければ、天国に入ることはできない」

と。「絶対に入ることはできない」ということをちゃんと言ってくれている。

「幼な児である」
ということが物凄く大切なことなんです。そして、
「生まれ変わる」
ということです。それをここでニコデモにちゃんと言ってくれている。
これは、「無条件」と言います。神さまの国に入るのは無条件です、条件は要らんですよと。ただ、条件が一つあるとしたら、それは「幼な児のようになる」ということなんです。幼な児のようにならなかったら、神の国に入ることができない、見ることさえもできない。それがここで非常に大切なこととして書かれている。
よく、ニコデモは平凡な人間と思われているけれども、僕らと一緒ですよ。ニコデモはパリサイ派だったでしょ。知識なんか物凄く持っている。けれども、知識を持っていても、「新しく生まれ変わる」ということがどういうことか全然理解できなかった。世の中でも知識のある人とかは、「生まれ変わる」なんてとんでもないと思ってますよ。けれども、キリスト教という宗教の根本はここなんです。
「生まれ変わらなかったら、みんな本当に天国には入れない」
そういうことをキリストははっきり言っておられる。「物凄く重要ですよ」ということを、「はっきり言っておく」と言っている。
僕はこれをよく遺してくれたなと思う。ニコデモはよく訪問してくれたなと思う。それでこういう言葉をヨハネが書き遺している。ヨハネはそこに居ったんですよ。ヨハネが居って、こういうのを聞いている。それだから、これをちゃんとヨハネが書き遺している。この会話というのはあまり引かれませんけれども、教会でもあまり言わないけれども、「新しく生まれる」ということがどれだけ大切かということをここでは言っている。

●『無者キリスト』の「十字架と無私」

小池辰雄がそういうことを言っているところがあるので、『無者キリスト』の69頁の「十字架と無私」（第一部「キリストの十転」第四転「伝道」「恵福なるかなたましいの貧しき者」）というところを読んでみましょう。

≪　十字架と無私

「さいわいだ、たましいの貧しい人たちは、天国はその人たちのものだから」

とは、実にその言の奥に

「私の霊は無一物、何ものでもない、全く神のものだ。そしたら有難いことに、天の父が全く私を支配してくださっている。私はそんな天国になった。」

という自身の体験の告白が秘められてあるのだ。「天国」という原語の「国」（バシレイア）は「支配」を意味する語で、神意の支配するところが「天国」である。≫

山上の垂訓で第一言が、「さいわいだよ、お前は」と言う。「さいわいだよ、あなた方は」

と――複数でも単数でもいい――「さいわだよ、お前は」とキリストは言うわけです。

「霊の貧しき者こそさいわいですよ」

というのは

「幼な児の魂がさいわいですよ」

ということなんです。

「天国で一番偉いのは小さい者、幼な児のような者が天国で一番えらい」

と、そういうことを言っている。

「さいわいだ、お前は。貧しい者よ、小さい者よ、お前はさいわいなんだよ、天国はお前のものだから」

と、山上の垂訓の第一言がこれなんです。

「私の霊は無一物、何も無い、全く神のものだ」

と。キリストがそういう姿で生きた人なんです。我々はそういう姿では絶対に生きていけない。我々は、要らんものをいっぱい持っている。キリストだけですよ、本当に何も持っていないのは。何も持ってないところに神の霊が充満したから、キリストはあれだけはっきりと神の子として活躍できた。

「天国」という言葉のことを小池辰雄は言っているけれども、天国というのは、天国という国そのものがあるのではなくて、「神が支配しているところ」というのが「天国」です。キリストが福音書で活躍されたでしょ。キリストの中に神が入りこんで支配して、行動を起こさせたから、それが「天国」なんです。だから、「我々は天国に入りますよ」というときにも、物凄く積極的で行動的なんです。神が支配してくださっている、キリストが支配してくださっているというのが「天国」なんです。そういう国の中にあなた方は入りますよ、見ますよという意味です。だから、ここで小池はわざわざ、

「神の御意が支配するところが天国です」

ということをここで言ってくれている。

その次の70頁の5行目から読んでみます。

≪「幸だよ。おまえは、たましいが貧しくなったね。天国はおまえにやるよ」

と。ああ何をかのぞもう！　このイエスのみ言のほかに。

私の投身したのは、キリストの聖言の中に。それもどうしてできたのか。それは「貧しさ」の極致なるキリストの実存の極みたる十字架の中への投身であった。キリストの中に入って、キリストの愛の十字架に十字架され、私がすっかり罪から解放され、「私」からすっかり脱落している無私、無我を受けとったとき、――相対的現実の者たる私が無私無我となったのではない――信仰の現実で無私を体受したとき何とそれは楽な、鴻毛（こうもう）よりも軽い、深山の霊気よりもすがすがしいたましいの誕生を見たことか。その十字架の無言の言で、「私」はすっとんでいることに気がついた。十字架という事

実にまさるいかなる烈しい強い熱い愛の言が天上天下いずこにあるか。行即言である。事実を以て迫る無言の言、事実という言が人間のたましいを動かす。「十字架の言（ことば）」とパウロがいったのはこのことである。》

ここで、

「私は十字架を受けとった。キリストの無を、何も無いものを私は受けとりました。キリストが砕かれた、その砕けを受けとりました」

ということが書かれている。そういう体験を小池はしたと思う。キリストの中へ自分が全身で入り込んだ。キリストが、十字架を受けとっている自分の中に全身で入り込んでくださったという体験を小池はしたんです。そうするとここで、

「私はすっかり罪から解放され、自我から解放され、「私」という自我からすっかり脱落して、自分が無いという、無私、無我を受けとった」

と言っている。人間ですから、最後の最後に死ぬまで自我で苦しみますよ。けれども、宗教的な次元では、

「私は本当に自我から、罪から解放されたんですよ」

ということを小池はここで言っている。

「信仰の現実で私は無私、無我ということを体験した。そうすると、何という楽な、鴻毛（こうもう）よりも軽い、物凄く軽く楽な、深山の霊気よりもすがすがしいたましいの誕生を見たことか。」

ここに「たまいしの誕生」と書いている。「魂が新しく生まれ変わった」ということを小池はここで言っている。新しい誕生でしょ。お母さんから生まれて僕らは誕生したけれども、新しい誕生を十字架をもって小池辰雄は体験したことを言っている。

「信仰の現実で無私を体受したとき、何とそれは楽な、鴻毛（こうもう）よりも軽い、深山の霊気よりもすがすがしいたましいの誕生を見たことか。」

これは小池辰雄の本当の体験の告白ですよ。小池はこういう体験をしたから、はっきりと「新しい誕生を見た」と言っている。ここで

「たましいの新しい誕生を見た」

と書いてくれたらいいけれども、小池はここで、

「生まれ変わった。十字架を受けとって新しく誕生を見た」

ということを言っている。

「その十字架の無言の言で、「私」はすっとんでいることに気がついた。」

十字架は無言ですよ。「お前のために死んだ」ということは、霊的にしか分からない。それを

「十字架の無言の言で、私はすっとんでいる」

という。

「自分はもう無くなっている」
ということです、「すっとんでいる」というのは。牧師さんとか偉い人は、この「すっとんでいる」というような言葉を使いません。けれども、小池辰雄はこういう言葉を使う。これは小池の事実というか、
「私はすっとんでいる」
と感じた事実なんです。
「その十字架の無言の言で、「私」はすっとんでいることに気がついた。十字架という事実にまさるいかなる烈しい強い熱い愛の言が天上天下いずこにあるか。」
もう十字架以外に何もありませんよと。さっき「十字架以外には誇るものはあってはならない」とパウロの言葉がありましたけれども、ここがパウロの言葉と呼応するわけです。
「これにまさるいかなる烈しい強い熱い愛の言が天上天下いずこにあるか」
と。受けとった時に即、受けとった瞬間にそれが行動に現われたということを言っている。「行動に現われる」というのは、なにも「いいことをする」というのとは違う。赤ちゃんのように喜ぶことが行動なんです。「ああうれしい！」と思ったら、それが行動なんです。僕らは、何かいいことをしてれば、それが行動だと思っているでしょ。そういうことではない。赤ん坊が喜んでいるあの姿が行動なんです。それが人を動かす。それが力なんです。
「行即言である。」
と。これは難しい言葉で言っている。「行即言である」とか言う。小池辰雄は明治時代の人だから仕方がない。これは赤ちゃんのように喜んでいるというのが顕（あら）わなんです。赤ちゃんは知らずに喜んでいるでしょ。自覚しないで喜んでいる。そういう世界を言っている。大人はそういうわけにいかない。赤ちゃんみたいにはいかない。それを難しい言葉で、小池は
「行即言」
と言っている。「行即言」とか言われても、世の中の人は分りませんよ、そんな言い方をされても。
「事実を以て迫る無言の言、事実という言が人間のたましいを動かす。」
と書いてます。十字架を受けとったときに、人間の魂が変えられて、動かされたということを言っている。本当に小池は、それで動かされたんです。
「「十字架の言（ことば）」とパウロがいったのはこのことである。」
「十字架の言」は何とかかんとかとコリント前書に書いてある。けれども、「十字架の言」と読んだだけで、「十字架の言」なんて分りません。あれだけ読んでも分からないけれども、小池がここで言っているように、
「自分が十字架を受けとったときに、物凄く変えられた。違う次元に誕生させられた」
というのが、ここで小池が言っていることなんです。だから、これは小池の、いってみたら、

自分の心情を吐露しているところです。

「幸だよ。おまえは、たましいが貧しくなったね。私の十字架によってお前の魂は貧しくなったね、

天国はおまえにやるよ」

と。「お前の中でこれからキリストが働きますよ」ということが、「天国をお前にやるよ」ということです。

「幸だよ。おまえは、たましいが十字架によって貧しくなったね。新しく誕生を見た。だから、お前の中に天国が支配するよ、神さまが支配する」

というのが、

「幸だよ。おまえは、たましいが貧しくなったね。天国はおまえにやるよ」

と、こう響いてきたと小池は言うわけです。そして、

「ああ何をかのぞもう！　他に何も望むものがない。このイエスのみ言のほかに」

本当に何も要りませんということをこの時、小池は真実をもって言っている。さっきパウロの言葉を読みましたね、

「十字架以外に誇るものはあってはならない」

と。「あってはならない」ではない。

「十字架の言葉以外にはもう誇るものは何もありませんよ」

という意味なんです。「あってはならない」とかいうと、これは律法になる。「あってはならない、してはならない、しなければならない」とかいうことになると、これは律法になる。律法はしんどいです。福音はもっともっと自由なんですよ。だからここで、

「ああ何をかのぞもう！　このイエスの言のほかに。幸だね、おまえは。お前は私の十字架で本当にたましいが貧しくなって、新しく誕生した。天国はおまえを支配するよ、神さまがおまえを支配する」

ということをここで言っている。これが小池辰雄の、

「幸だよ。おまえは、たましいが貧しくなったね。天国はおまえにやるよ」

という、こういう言葉で言っている。これは小池が真実、パウロと同じように、自分は十字架によって磔刑（はりつけ）にされた、もう死んでしまったということをここで告白している。

「キリストの中に入って、キリストの愛の十字架に十字架され、私がすっかり罪から解放され、「私」からすっかり脱落している無私、無我を受けとった」

と言っている。これが新しい誕生なんです。新しく生まれなければならない。小池の十字架の受けとり方というのは、本当にニコデモの会話と同じです。

「新しく生まれなければ神の国を見ることができない、入ることができない」

という、キリストのあの言葉がここで成就されているんです。こういうはっきりと十字架の受けとり方をしているのは、小池以外に僕は知らないですよ。パウロなんかはもちろん

そうだったでしょう。さっき読んだように、「新しい新創造」ということを言っているでしょ。パウロはちゃんと新しい次元に入ったから、ああいう言葉が出てきている。けれども、「新創造」とか言われても、何かはっきりしません。

「新しく生まれ変わる」

ということだったら、まだ分ります。キリストの言葉の方が分りやすい。それが小池辰雄の「十字架の無私」、私が無いというところの小池の心情の吐露です。

●幸いなるかな、霊の貧しき者

その次を読んでみます。

《私はキリストの十字架で、すっかり自分の霊が「無私」とされ、「貧しく」されているのを発見した！　私はもう何も憂えない。霊的傲慢やパリサイ的信仰や御利益や観念は、真にキリストにつく者の世界にはない。山上の大告白のこの第一言は、これらの逸脱や転倒や安易やズレに対する最大の否！である。イエスの全福音は実にこの第一言で喝破されている。キリストの福音は何だと問われるなら、私はイエスのこの第一言を以って答えるに躊躇しない。

「霊が貧しい」とは、私たちの霊がすっかりキリストの十字架で贖われ、砕かれている恩恵をうけとることをいう。そして「砕け」そのものを「貧しさ」そのものを「無」私そのものをわがたましいのすがたとなすことである。それは第一のアダム、旧き我の「死」の相である。》

この「山上の大告白のこの第一言」というのは、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。お前はさいわいだよ、霊が貧しい者よ」

ということを言っている。それは本当に、

「貧しいということがどれだけ幸いであるか」

ということをイエスは言っておられる。それが山上の垂訓の第一言に出ているということを小池は指摘している。山上の大告白のイエスの言葉の第一言の、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、心の貧しき者よ」

という言葉は、

「これらの逸脱や転倒や安易やズレに対する最大の否！である。イエスの全福音は実にこの第一言で喝破されている。」

ということを言っている。

「これが入口ですよ」

「天国に入る入口ですよ、天国を見る最大の関門ですよ」

ということです。霊が貧しくなかったら、天国に入ることができない。生まれ変わらなかったら、天国に入ることができない。天国を見ることもできない。

「霊が貧しいということは物凄く幸いなことです、天国がお前に来たんだから」

という意味です。

「イエスの全福音は実にこの第一言で喝破されている。」

全福音はこの

「幸いなるかな、霊の貧しき者。心の貧しき者こそ幸いなり」

という言葉で喝破されている、もう言い切っているということを言っている。

「キリストの福音は何だと問われるなら、私はイエスのこの第一言を以って答えるに躊躇（ちゅうちょ）躇（ちゅうちょ）しない。」

けれども、我々はそんな貧しくなれない。ある程度は、赤ちゃんみたいに心貧しいような人になるのは、ある程度までなんです。徹底的になることはできない。徹底的に砕けることができない。そこに十字架がある。徹底的に貧しくされるためには、十字架がどうしても必要なんです。仏教なんかではそんなことは言いません。けれども、キリスト教には十字架のシンボルがありますけれども、そのシンボルはこれなんです。

「「霊が貧しい」とは、私たちの霊がすっかりキリストの十字架で贖われ、砕かれている恩恵をうけとることをいう。」

と。

「ただ単に受けとるだけ、キリストの十字架を受けとるだけです。霊が貧しくなったら、受けとれません」

ということを言っている。十字架というのは、「己れが、己れが」と言っている人には物凄く難しくて、躓きになる。けれども、子供のように霊が貧しくなった人には本当に神の力なんです。パウロが、

「十字架の言葉は力だ」

と言っているでしょ、「福音は力だ」と。神が支配されるから、その力が漲（みなぎ）っているということです。

さきほど、讃美歌「信じ入れば」（A20）を歌いました。

「1　信じ入れば　　み力を得（え）　　行（わざ）に転じ
主に在りて　　力あり
主のみ霊（たま）こそ　　原始力ぞ！」

「原始力」という言葉を使いますけれども、本当に神の力は原始の力ですよ、神さま以外の他の力はないんですよ、ということが小池のこの歌詞にある。

「3　新天地の　　望みに生く
主の光を　　四方（よも）に放つ」
主に在りて　　力あり
主のみ霊こそ　　原始力ぞ！」

「四方に放つ」

とある。赤ちゃんを見たら、輝いて光を四方に放っていますよ。僕らは赤ん坊の笑顔を見たら、喜んで嬉しくなるのは、四方に光を放っているからですよ。大人の目に子供の愛らしさが物凄い感動をもたらす。そういう在り方になっています。

「新天新地の望みに生く」

大きな大きな望みに生きて、

「主の光を四方に放つ」

ずーっと放たれていますよ、赤ちゃんを見たらわかるでしょ。光を四方に放っているんです。

「主に在りて力あり
　主のみ霊こそ原始力ぞ！」

と歌っている。

この小池辰雄の『無者キリスト』と、この讃美歌「信じ入れば」はもちろん呼応しているわけです。小池の心情がこの詩に表われている。

「「霊が貧しい」とは、私たちの霊がすっかりキリストの十字架で贖われ、砕かれている恩恵をうけとることをいう。

我々は砕かれないとダメなんですよ。それがキリストの十字架です。砕かれて、これが恩恵です。恩恵を受けとるということ。これは恵みなんですよ。我々からは絶対に出ない。十字架で贖われて砕かて、その恵みを受けとっているということが、「霊の貧しい」ということ。そうすると、神さまがそこで働き給う、それが天国ですよということです。

そして「砕け」そのものを「貧しさ」そのものを「無」私そのものをわがたましいのすがたとなすことである。

小池はこのときに、貧しさの極みになった。砕け、貧しさ、無私そのものをわが魂の姿となすことができたんですよ、ということを言っている。

それは第一のアダム、旧き我の「死」の相である。」

「第一のアダム」という、これはパウロの書簡の中に出てきます。

「罪だらけの人間がここで死んでしまったよ」

ということを言っている。それが、

「私は十字架された。生きているのはもはや私ではない。キリストが私の中で生きている」（ガラテヤ2・20）

というあのパウロの言葉とここが呼応する。我々、生まれながらの人間は、本当に罪だらけ、自我だらけなんです。これは生きている間は仕方がない。肉体は重たいですから、どうしても死ぬまで引きずっていきます。けれども、

「神の世界ではもうあなたは完全に贖われたんですよ」

ということをここで言う。パウロもそういうことを言う。

「あなた方はもう罪のことなんか考えないでいい。これは全部、十字架で処罰されたのだから、もう何も憂えることはない。人間は悲しいことに、死ぬ最後の最後まで自我に苦しめられるけれども、そんなのはいい。もうあっちの世界では、それは完全に成っているんだから」

と。これを小池辰雄は「根源現実」という難しい言葉を使う。

「根源現実ではちゃんと成っているよ」

と言う。「根源現実」と言われても、分りませんよ、普通の人は。

「根源現実であなたはもう成っているんですよ」

とか言われても分からない。けれども、

「神さまの世界ではあなたはもうきちっと処理されたのだから、何も憂えることはないんですよ、もうそのままの赤ちゃんみたいな姿で生きてください」

というのが、この「生まれ変わる」ということなんです。

そこが難しいんですよ、僕は70歳をすぎるまで――今は84歳ですけれども――70歳を過ぎたころから、聖書が自然にわかるようになったんです、聖書を読んでも、この本を読んでも。それは、僕はキリストによって貧しくされた。いつのまにか貧しくされた。そうすると、生きることが歓びになる。小池は、

「信仰の現実で無私を体受したとき、何とそれは楽な、鴻毛（こうもう）よりも軽い、深山の霊気よりもすがすがしいたましいの誕生を見たことか。」

と。それを発見したという。

「あれ？　自分の中にこんなにすがすがしいものが入ってきている」

ということに初めて気づいたということを発見したと言っている。僕もそういう体験を――いつ体験したか知らない。僕は小池辰雄みたいに祈っていた時に変わったのではない――あるとき何か、聖書を読んだら、あるいはこの本を読んだら、物凄くわかるんです、

「えっ？　こんなことが書いてあったのか」

と。初めてわかって、それが知らない間に十字架で処理されていたんですね。

一人ひとりそういうことで、みんな処理されている。だから、歓んで生きてほしいというのが、僕の願いなんです。こんな易しい世界というのはない。ここに

「楽な、軽い、すがすがしい」

と書いてますでしょ。これを他のところでは、

「歓喜の世界」

と小池は言ってますよ、歓喜（よろこび）の世界と。楽しくて楽で軽くて、深山の霊気のようにすがすがしく、歓んでいる、これが魂の誕生の世界です。それを小池はいろんなところで言葉を代えて言ってくれています、

「十字架の言」

ということでね。これほどはっきりと言っている人は、他の教会へ行っても、あまり出会わない。

「そこをもうちょっとはっきり言ってほしいな」

と僕は思うけれども、何か上辺だけで言っているような感じもする。けれども、実際はその人と話をしてみないとわからない。教会のシンボルは十字架ですから、十字架というシンボルがどれだけ重要なものかということをここで小池は言ってくれている。小池は難しい言い方をしているから、それはわかりにくいですよ。

●人は新たに生まれなければ

ヨハネ伝3章のニコデモの対話のところをもう一度読んでみます。ニコデモが常識的に、

「2……**神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。**」

と言っている。やはり気になるんです、ニコデモもキリストの行動が、行為が。「これはただ者ではないな」とか思う。

3**イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。**

「よく覚えておけよ」ということ。

人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。

本当にクリスチャンとしては、これをはっきりとしておいてもらわないといけない。そしたら、トンチンカンなことを言うでしょ。

4**ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができましょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」**

そんなことはありえないけれども、「人間が生まれ変わるということはできるんですよ」ということをイエスは言っている。

5**イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。**

これは「霊の洗礼のことを言っている」と書いてあります。

6**肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。**7**『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。**

これは当たり前のことだから、そんなことに驚いたらいかんよと。

8**風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」**（ヨハネ3・2～8）

赤ちゃんの姿を見ていたら、本当にこういう自由の世界に生きていますよ。赤ちゃんな

んかは本当に今、神さまのところから来たばっかりだから、神さまのことが物凄くよくわかっている。言葉では発しないだけで、あの姿こそがキリスト者の本当の姿なんです。だから、僕はここに書いた。

「自分では何一つ出来ない赤ん坊が加護のもとに生きている、そんな世界です。幼な児のような誰もが入れるのでなければ福音（真理）とはいえません。

と。イエスは「私は真理です」と言う。そしたら、ピラトは「真理とは何か？」とか言うわけです。あれは大人のしょうもない会話ですよ。真理を前にして、「真理とは何か」と問うわけです。トンチンカンな質問です。けれども、「真理」という言葉は難しい。「真理」とは何か分りませんけれども、「本ものの世界」ということですよ、福音の本ものの世界が真理。本ものの世界、真理というのは、赤ちゃんが入れないと、これは真理とは言えない。勉強しなくては入れないとしたら、これは受験と一緒です。そういう勉強したから入れる、何々したから入れる、という世界ではない。もう贖われたから嬉しくて、何か立派なことをしたら、それは単に促されてしただけの話で、「それは私がそうさせているんだから、お前の力でやったのではない」ということです。「行」というのはそういうことです。自分の力でやったのと違います。

彼らが生きる歓びを喜々として全身で現わしているようなごく自然なあり方です。

我々は贖われると、ごく自然な生き方ができるようになる。もう他のことを気にせんでよくなるわけです。キリストだけを見ていけばいいわけだから、ごく自然な生き方になる。赤ん坊は自然な生き方をしているでしょ。ちょっと知恵がついたら、大人に誉めてもらおうとか、何かそういう意識が出てきますけれども、まだそういう意識のないときは、本当に赤ちゃんの姿というのは、福音で生まれ変わらされたときのあの姿なんです。

あの天真爛漫さに周りの大人もつい嬉しくなります。まさに光の子たち。どんな人にも幼な児のような光の子へと生まれ変わって欲しい！　生活のなか全存在で福音を生きて欲しい！」

新しく誕生をして欲しい、そういうことで福音を生きて欲しい、というのが神さまの願いです。

「自分の自我とか罪なんかに関係なしに歓んで生きて欲しい」

と、それが十字架なんです。それが神さまの願いです。

「新しく生まれ変わって、そういう生まれ変わった存在で毎日毎日を生きてくださいよ」

というのが神さまの願いなんです。

せっかく我々は生命をいただいたのだから、こういう物凄い福音の世界に生きないと、損なんですよ、只（ただ）だし。赤ちゃんは全存在で生きているでしょ。そういう生き方をしてくださいよ、ということが「神さまの本願」なんです。

「そのご本願が十字架の死に極まって、御子イエスは復活なさったのです！」

と。十字架に極まった。そこで小池辰雄が、

「それは第一のアダム、旧き我の「死」の相である。」

と書いていますけれども、そのあとに「復活」ということがこないと、これはそこで終わってしまう。ここで復活というのがその時に出てきて、初めて福音というのが完成するんです。

だから、ご本願が十字架の死によって極まって、贖いが終わって、そしてイエスがご復活されなかったら、これは死んだままなんです。今もキリストが生きておられるというのは、ご復活されたから生きておられる。そういう世界に私たちは生きているということなんです。だから、復活がなかったら、我々の信仰は本当にそこで終わってしまいます。

「復活なんかないとか思っているような人はダメだよ」

と、パウロはさかんに言うでしょ。「復活なんかない」という人に対して、「とんでもない」と言っている。

福音というのは、キリストが十字架で亡くなられて、葬られて、復活された。それが福音なんです。言ってみたら、それだけが福音なんですけれども、それだけ言っても何かわからないから、いろいろと言うわけです。それが神さまの願いですから、その願いに我々は本当に生きていかないと、せっかくこの世に生を受けたんだから、この世界に生きて欲しいというのが神さまの願いです。

もうキリストほどの凄い人はいないですよ、そういう意味で見るとね。ますますキリストというのは凄いなぁ、とんでもない人だなぁと思う。小池辰雄はキリストのことを

「とんでもないひと、大変なひと」

とかいう形容詞で言う。僕らではつかみきれいないですよ。あまりにも無限無量の愛に満ちて生命に満ちているから、人間の力ではとてもキリストを把むなんていうことは、おこがましくてできない。ただ受けとるだけ、我々はただ受けとるだけなんです。どこまでも神さまから頂くだけです。そういう世界が福音の世界なんです。だから、「福音を真に生きる」というのはそういうことを言っている。福音というのがどれだけ有り難いかということをここにも書いている。

「その福音のとんでもない有難さを再確認したいと思うのです。」

と、このセミナーで。福音の世界は物凄い有り難いこと、神さまの一方的なわざなんです。それを我々が受けとるのは、物凄い有り難いことで、世界にこれほど有ることの難しいということはないほど、これは凄い世界です。だから、

「福音のとんでもない有難さを再確認する」

これが僕の今回の「福音を真に生きる」というテーマがここにある。福音のとんでもない有難さを再認識するということなんです。

「福音を生きることは難しいことではありません。幼な児が入っていける、これほど単純な易しい道はありません。」

そして単純だし、ものすごく易しい。我々は、難しかったら嫌です。宿題は嫌ですよ、誰でも。難しい宿題はやりたくない。けれども、神さまの世界はそんなのと違う。

「あほみたいに生きていてそれでいいんですよ」

と、僕は極端にいうとそうなんです。

「もうあほみたいに生きていたら、それでもう充分なんです」

ということです。ただね、一言だけ、

「自分は主のものでありますよ」

ということだけ言って欲しいなというのが僕の願いです。その時に、

「ああ、自分はキリストのものなんだ」

ということを一言でいいから、ちょっとでもいいから言うこと。だから、僕はこのキラキラ光るような十字架をさげている。これは白鳥座が十字架に見えるから、これを付けていたら、気づく人は気づいてくれるから、聞かれると、

「これは十字架の代りに付けているんですよ」

と答える。男はキラキラ光るものをあまり付けませんよ。これを付けていたら誰か気づいてくれる。何でもいいから、そういうふうな生き方をしてほしいなというのが僕の願いなんです。

●和解

コリントの信徒への手紙第二の5章17節から、

「17**だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。**18**これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。**19**つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」（コリント二5・17～19）

ここに「和解、和解」と書いていますね。「神と私たちが敵対していた」ということをパウロは他のところで言っている。

「神に敵対しているから、みんなが十字架に付けたんだ」

というようなことで、神と我々とは水と油で、決して一緒になることができない。それほど敵対的関係だから十字架に付けたということをパウロは言うけれども、ここでパウロは、

「そうではないよ、十字架によって和解されたんですよ。神さまと我々は一緒になりました。神さまの子にされたんですよ」

ということでこの「和解」という言葉を使っている。神さまのほうは、人一人ひとりを神さまの子にしたい。それが「和解」という意味です。十字架によって神さまと我々との隔てがなくなって、その厚い壁がなくなって、和解されたというのでこの「和解」という言葉をここで使う。この「和解」といわれても、これは聖書の訳の分からん言葉ですよ。これは、十字架によって私たちが神の子にされた。神さまの願いは、

「一人ひとりを光の子、神さまの子にしたい」

というのが、神さまの願いで、それが「和解」という言葉なんです。

[20]**ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。」（コリント二5・20）**

「キリストに代わって私はあなた方に言いたい。本当に神さまの子として生きてください、それが和解ですよ」

ということを言っている。パウロは本当に願っているんですよ。コリントの人々に

「なんとかして神さまの子になってほしい」

というのがパウロの願いです。パウロは本当に神の子にされた、生まれ変わった。ダマスコ途上で聖霊体験をして。僕らはそんな体験はしてません。そんな体験はしてなくても、パウロが体験して生まれ変わったことは想像できます。だから、パウロは物凄く駆り立てられて

「宣教するんだ！」

とかいう言い方をしているでしょ。これは自分はしょうがないんですよ。

「もう神さまのほうからそう言われているから、仕方がなしに私はやっている。やらなかったら、自分は不幸だ」

とかいう言い方もしています。

「あなた方はみんな、神さまと和解させてもらっている。神さまの子に早くなってください。それを自覚してくださいよ」

というのがここに書いてある。「和解」という言葉はそういうことです。

コリントの信徒への手紙第二の5章11節から「和解させる任務」というタイトルが付いています。

[13]**「わたしたちが正気でないとするなら、それは神のためであったし、正気であるなら、それはあなたがたのためです。[14]なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。**

「正気でない」ということは、「狂気」ということ、狂っているということ。

「私は狂っているようにあなたに言いますよ」

と。この「狂っているように言う」というのは悪い意味ではない。物凄く駆り立てられて、

もう正気ではいられない。

「本当に狂おしいほどあなた方にこれを伝えたい」

というのが神さまの願いなんです。それを

「正気でないとすれば、それは神さまのためです。正気であるとすれば、狂ってないとすれば、それはあなたがたに狂気みたなものは示されないから、あなた方のためには、ちゃんと言いますよ。けれども、神さまから駆り立てられているときには、本当に正気ではいられない」

というのがパウロの願いなんです。願いというか、愛に駆り立てられている証拠なんです。だから、

「正気でない、狂気であるというなら、これは神さまがそうさせているんだ」

ということをここで言っている。

わたしたちはこう考えます。すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります。15その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。」（コリント二5・13～15）

パウロは、物凄いキリストの愛を受けとっているから、

「本当に生きるのも、自分自身のためだけで生きていたらつまらんよ。あなた方に全部、神さまのことを伝えて生きていきたい。それは自分のためではなくて、死んで復活してくださったキリストのために生きている。これほど易しい凄い世界はないんだから、そういう生き方をしてくださいよ」

ということです。けれども、我々は宣教しに行くわけではない。普通の日常生活をしているわけでしょ。特殊な人は何かやりますよ、宣教しに行ったりする。選ばれた人は、そういう世界で医療のために働いているとか、そういう人もいます。けれども、我々はみんなそんな能力もありませんし、日常生活が大切なんです。日常生活の場で神さまのために生きる。これが「福音を真に生きる」ということです。大部分の人が日常生活をしているわけでしょ。日常生活をしている人が物凄く重要なんです。特殊な、シュバイツァーみたいにあんなことをやったら、人からチヤホヤされるかもしれないけれども、そんなのとは違う。みんな普通の生活をしながら、福音を生きるということが大切なんです。

だから、最初に僕は、

「福音とは自分にとって何か」

という問いを書いたんですけれども、それは日常生活の中で本当に歓んで生きてほしい、福音を生きてほしいということで、僕はこの文章を書いた。これだけだったら分からないから、尾ひれを付けてしゃべりましたけれども、そういうことなんですよ。そういう思い

でこの文章を作った。6章2節にも、

「2**……今や、恵みの時、今こそ、救いの日**」（コリント二6・2）

と書いているでしょ。パウロにとってはこの時代に生きて、

「今こそ救いの日だ、今こそ恵みの時だ」

というを言っている。僕はこの文章の最後に、

「福音を生きるとは、……すべてが恵、恵がα（アルファ）にしてω（オメガ）。」

と書きました。

「**神さまはα**（始め）**にしてω**（終り）」

という言葉が黙示録にあるけれども、僕にとっては恵みがアルファにしてオメガです。始めから終わりまで「あ」から「ん」まで、これは恵みなんです。僕らは自分で得たものは何もない。全部、神さまからもらったものです。全部恵みなんです。だから、「あいうえお」の「あ」から「ん」まで、それが「αにしてω」ということです。全部が我々にとっては恵みということ。だから、ヨハネ伝の一番最初に、

「**恵みの上に更に恵みを付け加えられた**」

と書いてあるでしょ。ヨハネ伝第1章16節に、

「16**わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。**17**律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。**」（ヨハネ1・16～17）

「恵みの上に更に恵みを受けた」とある。

「恵み以外にない。恵みオンリーです」

ということを言っている。だから、我々の生活は全部、神さまの恵みで生きているみたいなものですよ。それに極まったのが十字架なんです。だから、ヨハネ福音書の第一番に、

「**初めに言（ことば）があった**」

と書いてますけれども、本当にこれは

「恵みの上に恵みを付け加えられた。もう恵み以外にはないんです」

ということをヨハネはこの福音書の第1章で強調してくれている。これをサァーッと読んだら、そのまま通ってしまいます。けれども、本当に「恵みの上に恵み」なんです。絶対に恩寵（おんちょう）です。自分の力からは出ていない。パウロは、自分を「土の器」と言っているでしょ。

「土の器に宝が入ったきた。自分はどこまでも土の器だ」

と言っている。その土の器に神さまを盛ってきているんだということです。だから、恵みなんですよね。

では、それぐらいにしておきましょうか。

あと、何か質問があれば……（省略）……。